

東日本大震災によせて

「新しい公共」推進会議委員一同からのメッセージ

3月11日に突然日本を襲った大震災。報道を通じて見た、また、現地で直接目にした惨状と傷痕に、多くの人は愕然とした思いを持った。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、家族を失った方々、地震・津波の被害を受けた方々、原発事故で避難生活を余儀なくされている方々に心からお見舞いを申し上げます。

被災者にとっては、育った家、毎日の生活をしてきた愛着のある町並み、長い歴史の積み重ねと文化の集積である地域が一瞬にして瓦礫と化した。私たちも深い悲しみと喪失感を感じざるを得ない。

想像を絶する大惨事の中での一筋の光明は、被災者の人々が互いに助け合い、支え合い、秩序ある行動をとっている姿であり、自治体職員、警察官、消防団員・消防隊員などが被災を抱えながら住民のために尽くしている姿であり、また、避難所等でのボランティアの活躍や自治精神の発露だ。各地から派遣された自衛隊や消防隊などの献身的な活動、大小さまざまな企業のまさに「新しい公共」の重要な担い手としての積極的な活動、全国の人たちから瞬く間に義援金が集まったこと、また、世界各国から次々と暖かい支援と応援が届いていることも、みなに勇気を与えている。

「新しい公共」円卓会議と推進会議では、「互いへの配慮」や「自助の精神」のある社会の形成に向けた議論をし、「新しい公共」宣言で「日本には、古くから、そのための知恵と社会技術があった」と指摘した。しかし、それらは、私たちが提案したり指摘したりするまでもなく、大きな苦難の中の被災地で力強く息づいている。そのような日本の姿に、私たちは誇りを感じるとともに、希望を見いだしている。全国のボランティアたちは「誰もが誰かのために貢献することができる」ことを、改めて感じている。

今回のことは、日本社会が本来持っている「ちから」を示しているとともに、近代化された生活様式や社会の仕組みそのものに対して、持続可能な社会を目指すことなど、立ち止まって根本から考える機会を提供している。ここからどうするかが大事だ。私たちは、脚下照顧し、しかる後に、被災地の人たちと共に前を向き、ひとりひとりが自分のことを行ってゆく事で「支え合いと活気」のある日本を再興する気構えを持って行きたいと思う。